

目次

巻頭エッセイ

- 2 ひとしづく 果物と日本人 石毛直道

特集 みずみずしい果実

- 6 歴史 石器時代のクリから現代のオレンジまで
—日本の果実文化変遷史 梶浦一郎
- 9 果樹栽培 研ぎ澄まされた日本の果樹栽培
—高品質追求の道のりと展望 杉浦俊彦
- 12 在来果実 暮らしを支えた東北の果実
—「イワテヤマナシ」の保全と利用 片山寛則
- 16 川と果実 川が運んだ肥沃な土から
—幻の洋ナシ「ル レクチエ」と輪中地帯
新潟市南区白根地区
- 20 果実生活 食べることで世界を救う「果実」
—約12年間、フルーツ食を継続中 中野瑞樹
- 24 柑橘普及 ミカンをもっと知って、食べてほしい！
—若者たちの「柑橘普及大作戦(プロジェクト)」
清原優太 福田夢月(東大みかん愛好会)
- 28 果実的野菜 台地で育つ、甘いスイカ
—「すいかの里」千葉県富里市の挑戦
千葉県富里市
- 32 果実料理 ふだんの暮らしにもっと果実を
—アクセントや深みを醸す食材として
中川たま
- 36 文化をつくる 水や土と私たちをつなぐ
果実という存在
編集部

Column

- 39 水の余話 水は何処に 沖 大幹

連載

- 40 水の文化書誌58
全国の里川を歩いてみよう！ 古賀邦雄
- 44 みず・ひと・まちの未来モデル1
地域社会の未来を水場から考える 野田岳仁
- 50 センター活動報告
- 51 編集後記／ご案内
(敬称略)

特集

みずみずしい果実

人口爆発による食糧不足や気候変動など、地球が抱えている課題からも果実が果たす役割は重要となる。それは世界中でたくさん果実を食べればその分だけ果樹が増え、緑地も広がっていくはずだからだ。おいしくて楽しい気分がさせてくれるみずみずしい果実が、私たちにもたらすであろうことについて考えたい。

日本の果実のあり方は世界的に見るとやや特殊だ。甘みと見た目が重視される結果、高価になりがちで、日本人の果実摂取量は欧米人の半分以下といわれる。そして国内の果樹農家は稲作農家以上のスピードで減っているという。

例えば、今ある果実の多くは、明治時代以降に導入されたものであることや、海外では水分を得るために果実を食べ、また野菜と果実を特に区別せずサラダとして混ぜ食べていることなど。

水分をたっぷり含む果実は、食後のデザートとして大好きな人が多い。旬に贈答品としていただいてもうれしいものだ。しかし、ふだんから食べている割に、私たちは果実のことをあまりよく知らない。

■「水の文化」68号で取り上げる「果実」について

農林水産省が定める果樹(クリやウメ、ミカン、ナンなど=おおむね2年以上栽培する草本植物及び木本植物で果実を食用とするもの)のほか、文部科学省が「日本食品標準成分表」で定める「果実類」(草本植物から収穫されるものであっても通常の食習慣において果物と考えられているイチゴやメロン、スイカ)とする。ちなみに、メロン、イチゴ、スイカは、総務省の「家計調査」でも「生鮮果物」として扱っている。